

二〇〇七年センター試験 漢文 解説速報

【全体講評】

昨午が易しすぎたので、難化するだろうという大方の予想どおりの問題。旧課程の「国語Ⅰ」と「国語Ⅰ・Ⅱ」との中間ぐらいの難易度を狙ってくるはずと繰り返し述べてきたが、びたり想定内のレベルとなった。また、数年ぶりに漢詩を含んだ出題となった。「センターに漢詩は出ない」などという風説を信じていた受験生もいるようだが、詩を含んだ文章の形で出る可能性はあると短期攻略ゼミ等で何度も言ってきたので、それなりに準備をして臨んだことと思う。総体的には、一昨年までと同様、きちんと漢文の受験準備をした者と、しなかった者との差がつきやすい問題設定である。設問内容はバランスがとれていて、比較的良問であるといえるだろう。

【読解のポイント】

出典は姚元之『竹葉亭雜記』巻六。清代の隨筆集という、センターとしてはこちらと珍しい新しい時代の出典。「雜記」と称するように、筆者が折に触れ書き留めたよしなしごとを、その死後に整理しまとめなおしたものだ。巻六には主に筆者の同郷の人のエピソードが載せられている。

前半の文章部分はさほど難しくはない。普通の力があれば、何を言っているかはわかったはずである。設問も、一見難しく感じるものもあるかも知れないが、文章全体の意味がつかめていけば、選択肢は選べるだろう。問題は、漢詩を含んだ後半部分の解釈。まずは設問の選択肢などもヒントにしながら、詩の意味をつかむこと。そこから試験官の評語の内容を考えることが必要である。しかし、それも最後の「仍りて第一に取る」から逆算してゆけば、正解を導き出すことはさほど難しくなかったはずである。

【設問解説】

問1 今回初めて登場した新傾向の設問。従来、問1の漢字の意味を尋ねる設問は、「善」ならば「善」の字を含んだ熟語の中から選ばせるパターンであったが、今回はその字を含まない熟語を選ばせるという形となった。従来のパターンならば、仲間はずれを見つけたら済んだが、今回はその字の意味がわからなければ答えられないので、少し難易度が上がったといえるだろう。

(1)もう授業で十回以上はやった「善」の用法。「くを善くす」で「くするのが得意だ」という意味。その意味に一番近いのは、当然「特技」しかない。

(2)こちらは少し難しい。「疾」という字の意味を知っているかどうかよりもむしろ、前後の文脈が読めているかが勝負だろう。「試を同じくする者」が、「其の試毎ごとに首に居る」を「疾」したのである。「其の」は当然人称代名詞で「錢」のこと。「首に居る」が「トップに居ること」であるのは、何度もやったのですぐわかったはず。一行目の「錢は必ず冠軍たり」もヒントであることは言うまでもないだろう。そうすると、「疾」が同音の「嫉」と同じ意味であることに気づくであろう。「音通」については、何度も説明したので記憶に残っていただろう。つまり、いつもトップの錢を「ねたんだ」と言っているのである。したがって、選択肢の中では「憎悪」が一番近い。

問2 これはもう、基本中の基本の問題。解説は不要であろう。三つとも何度何度も繰り返しやりやっただので、読めなかった者はないはずである。

問3 一度消滅した返り点と書き下し文を選ばせる設問が、復活した。ポイント①は「不肯」と「使」の読み方。「使」は当然〈使役動詞〉なので、「醒めしむ」と読む。これで、まず①と③が消える。「肯」は「①あえて・②がえんず」という読みがあるが、否定詞の位置から考えて、「呼ぶ」が否定されなければおかしいので、②は不適合。④と⑤では、文意から考えて（妬んでいたの）「彼を呼んで目を覚まさせる」ことはしなかった、とならな

ればならない。よって⑤が正解。こちらが選べれば、解釈の方も③に決まるであろう。

問4 言葉の意味を問うというより、文脈から意味を考える問題。「已に及ぶ無し」は、「もう間に合わない」の意なので、まず①と②が消える。あとは「卒爾」という言葉を知っているかどうかが分かれ目。「卒爾」は「急いで・慌てて」の意。すると「強引に」の⑤が消える。④は「解答用紙を取り戻すことはできないので」が誤り。よって③が正解。

問5 毎度お馴染み「押韻」の問題。七言なので、初句と偶数句に押韻しているはず。しかし「望」と「間」では音が異なる。その場合は絶対に踏んでいる偶数句を手がかりにする。「間」と同音は②「淡」と④「山」。ふたつ残ってしまったので、あとは解釈の比較となる。「一片の白雲」は、やはり「白雲の切れ間」ではなく「ひとひらの白い雲」がふさわしいであろう。

問6 最後はやや難しい設問。とりあえず、問6の基本は、消去法である。まず、選択肢を横に見ると、「形式の異なる作品であった」ということと、「高く評価した」ということがわかる。「賦」を作る課題に対して、苦し紛れに「絶句」を提出したのであるから、「形式が異なる」わけでは不合格になってもおかしくない。しかし最後に「仍りて第一に取る」と述べているから、「形式が異なる」にもかかわらず「高く評価した」ことになる。あとは、残りの部分から、文意に合わないものを消してゆく。「日月の人間を走る」という表現から、「人間」が「にんげん」ではなく「じんかん」であるとわかる。そうすると、「人間界まで駆けおりたい」という①は消える。②は「逆方向に運行する」が不適。④は「逆立ちしながら見てみたい」が不適、また⑤は「人間界を走るのを見上げたい」が不可。よって③が残る。

【書き下し文】

吾が郷の銭明経、詩賦を善くす。毎歳督学の科歳に古詩を試みるに、銭は必ず冠軍たり。一歳、題は天柱の賦たり。銭場に入る時、酒を飲むこと多きに過ぎ、竟に大酔し、号に入るに輒ち酣睡す。試を同じくする者、其の試毎に首に居るを疾み、肯へて之を呼びて醒めしめず。納卷の者、其の旁を過ぐる有りて、之に告ぐ。銭始め瞢然たるも、已に及ぶ無し。卒爾として題を問ひ、七言絶句一首を書す。詩に云ふ、

「我、揚子江頭に來りて望めば、一片の白雲、数点の山。

安くんぞ身を天柱の頂に置き、倒に日月の人間を走るを看るを得ん。」
 学使、卷を得て、評して云ふ、「此の人中に幾雲夢を呑むかを知らず」と。仍りて第一に取る。

【現代語訳】

私の同郷の銭明経は、詩賦を得意としていた。毎年、督学が科歳の試験に古詩を作る課題を出したが、銭は必ず成績最上位者だった。ある年の課題は天柱の賦であった。銭は試験場に入る時、酒を飲み過ぎていて、ついに大酔し、個室に入るとたちまちいい気持ちで寝入ってしまった。一緒に試験を受けていた者は、彼が試験のたびに首席であるのを妬んで、あえて彼を呼んで目ざめさせなかった。答案回収係が、彼の傍らを通り過ぎて、彼に試験終了を告げた。銭は始めぼんやりしていたが、もう間に合わない。大慌てで課題を尋ねて、七言絶句一首を書き上げた。その詩に云う、

「我、揚子江のほとりに来て望めば、一片の白雲といくつかの山々が見える。どうしてわが身を天柱のてっぺんに置いて、さかさまに日月が人間世界を巡るのを見下ろすことができようか。」

督学は、答案を見て評して云った、「この人は胸中にどれだけの雲夢を呑み込んでいるのか見当もつかない」と。そこで一番の成績をつけたのである。